◎沖縄タイムス　2016年07月13日　朝刊28面　記事数：1/1　<1/1枚>
ここにいるよ　沖縄子どもの貧困（５３）＝第４部　支援の現場から（１６）　子ども食堂（５）

公民館 子の居場所に

地域で見守り 孤立を防ぐ

第４部 支援の現場から〈16〉

ここにいるよ 沖縄 子どもの貧困 ㊸

子ども食堂 ⑤

「自分が教室に入った瞬間、クラスのみんながシーンとなるんすよ。居場所なんてないっすよ」。不登校の男子中学生のそんな言葉が耳に残っているという。

那覇市繁多川公民館を指定管理運営しているNPO法人1万人井戸端会議の織徒子荊代表は、公民館に出入りする子どもたちのつぶやきに聞き入る。窓口で彼氏の話をしていく女子高校生もいれば、学校で嫌なことがあったと興奮をこぼしていく小学生もいる。

学校に居場所がないと言った不登校の中学生は公民館に通ううち徐々に心を開き、清掃や畑仕事などを手伝い始めた。自信を失いかけていたが、公民館の利用者に「がんばってるね」「ありがとうね」などと声を掛けられる機会が増え、高校進学の意欲を取り戻した。

織さんは「登校はできないけど公民館には来られるという子もいる。公立公民館は誰でも利用できる生涯学習施設。さまざまな子にとって安心できる場所になれれば」と語る。

■　■

繁多川公民館はこれまでも子どもの活動に積極的に取り組んできた。ジュニアボランティアには中高生約80人が登録。高校生のリーダーたちが集まり、夏休みには敷地内でキャンプをする「部活でサバイバル」などを企画している。子育て中の親子の孤立を防ぐための「出張保育」や小学生対象の市放課後子ども教室も開いている。

高校中退防止対策の一環で、高校生の研修も受け入れている。イベントを手伝った高校生に「感謝状」を作り、全校集会の場で校長から手渡してもらったところ、複数の子が「生まれて初めて賞状もらった」と予想以上に喜んだ。「褒められた経験がほとんどない子もいる。ちょっとしたことで子どもは良い方にも悪い方にもいくんだと、あらためて実感させられた」

■　■

昨年12月から月1回、地域の子どもと大人が一緒に夕食を作り、食卓を囲む「いどばたこはん会」を開いている。那覇市牧志で若者の居場所を運営する「kukulu（ククル）」と共催。小学生や中高生、70代の民生委員・児童委員など幅広い年齢の参加者が協力して夕食を調理し、みんなで食べる。社会的に孤立する子どもや家族を減らしていこうとする試みだ。

参加する子どもの中にはボ不登校の子もいる。人前で話すのが苦手だが、ごはん会で毎回「沖縄の怪談話」を披露するのを楽しみにしている子や、「兄貴分」の中学生に懐く小学生もいる。地域からは毎回、新鮮な食材や食材の差し入れがあり、取り組みの認知度も高まってきた。

運営側は「ごはん会」を地域の気になる子を早めにキャッチし、継続的な支援につなげていく「入り口」に位置付ける。「貧困」のレッテルにつながらないよう注意しながら取り組んでいく考えだ。

「糸がプッツリ切れたら飛んでいってしまいそうな子もいる」と心配する織さん。「細い糸でも長くつながって、成長を見守っていきたい」と語る。

「地域で支えられて育った子の中から、地域のために活動する子が出てきたらうれしい」。日々の活動に温かれながら夢を描く。（「子どもの貧困」取材班・田崎正雄）

＝随時掲載

毎月1回の「いどばたこはん会」。地域から新鮮な食材が届けられる＝那覇市繁多川公民館

記事に関するご意見、情報をお寄せください。
ファクス：098（860）3483　メール：kodomo-hinkon@okinawatimes.co.jp